

及被申上御斷、御輦下御之儀有間違、故此事者即御斷被申上由、内々物語也、一列聞之大令安心、乍併後來尙用心可覺悟事也。疑次將被申上御斷歟

〔宗五大草紙下〕公方様御成の様體の事

一雨ふり候時、御こしにゆたんかけられ候事は、公方様御輿には見及不申候、御旅にて、一段雨降風吹候へば、懸られ候由に候、さ候へば御供衆も蓑をめし候、御こしに、ゆたんかけられ候はねば、御供衆もかさを御さし候はず、御臺様の御こしには、いづくにてもゆたんか、り候、御車の時は、御ゆたんか、らぬ程は、御供衆もかさを御さし候はず候、

〔伊勢兵庫頭貞宗記〕輿のゆたんの事

一輿のゆたんの事、塗輿には掛り候はず候、但旅の時か、り候事も候、板輿にはか、り候、公方様御輿に、ゆたんかけられ候事見及不申候、一段雨風候得ば被懸候よし候、然ば御供衆笠さし候、御臺様そとの雨に御輿ゆたん被掛候也、

〔貞丈雜記輿七〕一輿のたてむしろの事、御成次第古實に云、御こしにめしをりの時、御供衆あつかひにて、むしろは、雨もふり道わるく候へば、御こしよりたてむしろを引出して、たてられ候て、かぎに御かけ候べく候、さりながら前のすだれおろされ候は、ではわろく候、是はむかひ風に雨つよく入候は、の儀にて候、さて御宏やうりを御小者參らせ候、此分除て見べし雨もよく候時、たてむしろは引出候はぬ物にて候、立むしろは、よこ雨の御用までにて候也、云々、たてむしろは、疊の表にへりを取て、輿に入置て、風雨の吹時引出して、簾の外よりかくる成べし、

〔輿車圖考二〕鳳輦

く。床。の。こ。と。を。按。ず。る。に。世。俗。淺。深。秘。抄。云。○中くれどこを伏してとも、又は平敷ともあるは、いづれ御こし高ければ、雨皮のかけがたきをもてなめり、さるに橋本經亮は、伏といふも、たゞにく